比べ読みで身につく学力
古典学習指導の実際－『枕草子』の授業から（２）－

金子　直樹

本稿は，「中等教育研究紀要」前号（第 50 巻）に発表した「比べ読みで身につく学力　古典学習指導の実際－『枕草子』の授業から（1）－」の続編である。前稿では『枕草子』類聚的章段での学習の実際を報告したが，本稿では『枕草子』日記的章段を中心にして，『大鏡』『栄花物語』など他のテキストも含めた「読み比べ／比べ読み」学習の実際と，その到達度を報告する。

新学習指導要領では，新設「古典Ｂ」の内容として「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ，共通点や相違点などについて説明すること。」という「読み比べ」の事項が新たに加えられるが，これは従来の古典指導の実際としても各教室で行われてきたことでもある。「読み比べ／比べ読み」の学習によって，どのような学力がつくのかを具体的に検証し，特に古典学習における意義を再確認する。

１，はじめに

本稿は，前稿に続き 2009 年度広島大学附属福山高等学校２年生の古典の授業から，主に二学期に実施した『枕草子』日記的章段を扱ったものの記録である。

前稿でも述べたとおり，「比べ読み学習でのポイントは，あれこれの場面や状況，文脈から抽出された共通性を，自らに当てはめ確認することによってもたらされる，読みの具体性と現実感」である。「具体性」や「現実感」とはもちろん生徒のものであり，主体はテキストにあるのではない。比べ読みが，複数のテキストをただ比較して共通点や相違点を確認するという作業にとどまるのであれば（そのような言語活動や経験も途中過程として必要なものではあるが），生徒にとっては読解にやっかいな教材が増えたというだけである。

その意味でも比べ読みの授業を実施するには，何をどう比べるのかという教材配列や単元構成に注意すべきである。特に古典の学習においては生徒にテキストを選択する自由は無いのであるが，何と何とをなぜ比べているのかという学習活動のつながりを，生徒が明確に意識する仕掛けが必要であると考える。

また，比べ読みの結果明らかになったものが，偶然そうとも言えるもの（教師が魔法の手つきで差し出したもの）ではなく，考えるに足りる十分な信頼性や確実性を持っていることを生徒が意識することも必要である。「どうせ僕たちが知らない古典の世界なのだから」とか「そんなのたまたま，レアケースだろう」で済ませることのできない問題として意識するために，例証を重ねることで問題が顕在化し，読みの「量」が「質」的な転換を起こす仕掛けが重要になる。このような点から，「比べ読み」のためには，その前提として十分な量の「重ね読み」が必要になってくると考える。

２，単元展開１－類聚的章段との比較－

一学期に実施した『枕草子』類聚的章段での，形容詞「をかし」についての学習を活かして，清少納言が定子一族をどのように描写しているのかを中心に授業を展開した。扱った教材と順序は次の通りである。

・184 段「宮に初めて参りたるころ」，
・313 段「大納言殿参り給ひて」，
・102 段「中納言参り給ひて」，
・129 段「関白殿黒戸より」

以下に学習記録を抜粋して実際の授業の様子を紹介する。（傍線部は引用者，…は前後略。以下同じ。）

生徒学習記録１（「宮に初めて参りたるころ」１時間目）

…この段を読んで思ったことは，類聚的章段の文章から受けた清少納言のイメージと全く違う，ということだ。類聚的章段での筆者は，とても強気で，上から目線で，頭の回転が速い，いわゆる「都会の女性」という感じであったが，ここではあまりイケてない，コンプレックスを持つ女性という感じである。どうした清少納言，本当のお前はどっちなんだ。文章では，常に宮と比べて自分のことを書いており，もしかすると宮がどれだけすばらしい人物であるかを描くために，わざと自分の方をダメダメにして差を付けているのでは，とも思えるほどだ。…

生徒学習記録２（「宮に初めて参りたるころ」２時間目）

日記的章段に入って，清少納言という女のことが分からなくなってきた。類聚的章段ではあれほど強気で歯に衣着せぬもの言いをしていた清少納言が，一転してマイナスオーラを放って常にへりくだっている。（中略）前の時間の内容から，私は，清少納言は本当はものすごいコンプレックスの塊で，日記的章段で書かれているのが真実の姿であるが，宮仕えのストレスを発

散するために言いたい放題をしたのが類聚的章段か，という仮説を思いついていた。『枕草子』中の類聚的章段と日記的章段とを別物（清少納言の別々の性格の表れ）として考えたのであるが，今日の授業でも日記的章段の中にも類聚的章段によく出てきた「をかし」や好奇心が顔をのぞかせていた。こうなると類聚的章段と日記的章段とはつながってきて，私の仮説は没になってしまった。残念きわまりない。『枕草子』の全体像をどう捉えるのか，これから注意深く探ってゆきたい。

生徒学習記録３（「宮に初めて参りたるころ」４時間目）

「宮に初めて参りたるころ」の出だしは，それまでの類聚的章段で見られた「清少納言節」がなく，別人なのではないかと心配するほどでした。さらに，定子に加えて大納言伊周までも出てきて話はますます面白くなりましたが，兄妹の会話を覗き見し，その洗練さに感銘するあたりに，やっといつもの清少納言が表れてほっとする一方で，いくら大納言とはいえ二十歳そこそこの伊周のペースにすっかり巻き込まれている清少納言には少々がっかりもしました。後半では，定子にまでもからかわれることで，逆に宮仕えにしっかり慣れている様子も読み取れます。初めは「変化のもの」とまでも思っていた定子からの呼びかけにもばっちり返歌をしていて，「清少納言節」を発揮していることに安堵しました。この段は，読者としてはまるで親の心地になって，清少納言の成長記録を読んでいるようですが，実はこれはわずか一，二日の間の出来事です。何だかだまされたような気もします。『枕草子』の日記的章段が回想記録であることは助動詞の使い方からも明らかなのですが，この書き方にはなにか仕掛けがあるような気がしてなりません。

３，単元展開２－『大鏡』との比較－

『枕草子』において，「をかし」や「めでたし」などの形容詞によって称賛されている定子一族が，他のテキストではどのように描かれているのかを中心に授業を展開した。扱った教材と順序は次の通りである。（授業時間数の関係から*印については問題演習の形式でテキストを扱った。）

『大鏡』「太政大臣道長伝」より，

・「道長の幸運」「弓争い」「肝試し*」，

「内大臣道隆伝」より，

・「道隆の飲酒*」「双六*」「隆家の剛毅*」

この展開での最後のまとめとして「道隆・伊周・隆家の三人について，『枕草子』日記的章段と『大鏡』道長伝での人物像の共通点をふまえた上で，それぞれの描き方についてまとめる」というレポートをＢ５用紙一枚に書かせた。以下にそのレポートを抜粋して実際の授業の様子の紹介とする。

『大鏡』レポート１

道隆に共通するのは，その大らかな人柄と，私的な場と公的な場で態度を切り換えることができる点である。ただし，『枕草子』で注目されているのは立派な面のみで，『大鏡』のようにだらしない面は出てこない。伊周は，学識があり能力的に優れている点では共通しているが，『大鏡』においては幼稚で心遣いのできない人物として描かれている。隆家は，単純で器の大きい人物であることが共通点だが，『大鏡』では，その誇り高い一面も見ることができる。これらから分かることは，『枕草子』と『大鏡』では人物を見る観点がずれているということである。清少納言が，教養や栄華など自分の興味のある点について掘り下げて書いたのが『枕草子』だとすると，道隆や伊周の素晴らしさは強調されているのに，格別教養が深いわけではない隆家についてはあまり描写がないことも説明できる。それに対して『大鏡』では，より多面的，客観的に人物を描いていて，『枕草子』よりも全体像に近い人間が表現されていると言えると思う。

『大鏡』レポート２

…『枕草子』『大鏡』ともに，道隆の威厳，伊周の教養，隆家の剛毅さなどの長所ははっきりと描いている。一方，相違点として，伊周，隆家の短所欠点とも言えるものは『大鏡』にのみはっきりと感じられる。しかしこれらの欠点は，実は『枕草子』でも描かれていたものである，と思う。隆家の短所である機転の利かなさは『枕草子』にもはっきりと描かれていた。伊周の短所であった幼さ，子供っぽさは，『枕草子』でははっきりとは分からない。しかし伊周が時折見せていた，清少納言をからかったり，定子と詩歌の引用をし合ったりといった，いわゆる茶目っ気は，子供っぽさと表裏一体のものではないだろうか。

４，単元展開３－定子像の描き方①－

『大鏡』との比べ読みによる方法を発展させて，次に『栄花物語』との比べ読みから，『枕草子』では定子がどのように描かれているのかを中心に授業を展開した。扱った教材と順序は次の通りである。

『栄花物語』巻五「浦々の別れ」より，

・「隆家配流*」

巻七「とりべ野」より，

・「定子の嘆きと清少納言*」「定子崩御と葬送*」

『枕草子』より，

・23 段「清涼殿の丑寅の隅の」

・299 段「雪のいと高う降りたるを」
・238 段「細殿にびんなき人なむ」

この展開での途中まとめとして,「定子について,『栄花物語』での姿と比較しながら,『枕草子』ではどのように描こうとしているのかについてまとめる」という内容をＢ６用紙一枚で簡潔に書かせた。以下にそのメモを抜粋して実際の授業の様子の紹介とする。(なお,生徒メモ１，２は，それぞれ前出の「大鏡」での生徒レポート１，２と同一生徒のものである。)

『栄花物語』メモ１

実家の没落に際し悲しみの中に亡くなった定子であるが,『栄花物語』では彼女の本質とも言うべき頭の良さが表れていない。定子の輝きは，他の教養人と楽しみを分かち合う余裕のある，栄華の中でこそ発揮されるのかもしれない。『枕草子』では，その部分をことさらに描こうとしているように思う。

『栄花物語』メモ２

『栄花物語』では身内が左遷されたり悲劇的な境遇が描かれていた。しかし『枕草子』では恵まれた境遇にいる定子の，人間的な内面を主に描いている。伊周にも似た，いたずらっぽい定子が，周りの人々を試す様を中心に描いている。

授業展開の実際例として，以下に学習指導案（略案）と生徒学習記録を紹介する。この授業は当校の第 52 回教育研究会の公開授業として行ったものである。

１．教材

「雪のいと高う降りたるを」・「細殿にびんなき人」)

２．本時の主題

①中宮定子への賛美を，和歌や漢詩文を用いた機知にあふれたやりとりという文脈に即して，具体的に理解する。
②『枕草子』の「日記的章段」に見られる叙述の方法を，複数の章段の読み取りから理解し，清少納言の表現の意図を読み取る。
③敬語に注意して文脈を正しく把握する。

３．授業展開過程

○は学習活動，＊は指導上の留意点,・は評価の実際

（１）導入

○前時までの復習と本時の目標の確認。
○『栄花物語』との比較(メモ)の発表。
＊中関白家の没落を具体的に表した『大鏡』『栄花物語』との違いに注目させる。
＊『枕草子』の方法を読み取ってゆくことを確認する。

（２）展開Ⅰ（５分～）

○「雪のいと高う降りたるを」(299 段）を読む。
①範読，斉読。
②前提となっている『白氏文集』の詩句を読む。
・声に出して読んでいる。
・漢詩を訓点に従い正しく読んでいる。
③「笑はせ給ふ」という定子の評価,「この宮の人にはさべきなめり」という周囲の評価の意味を考える。
＊敬語に注意して読むことで，主語の理解など文脈を正しく読み取れることを確認する。
＊機知あるやりとりを好む明るい定子の姿を，既習の「宮にはじめて参りたるころ」(184 段）の学習内容からも想起する。
④「日記的章段」に見られる機知の表し方の特徴を理解する。
＊「前提（和歌や漢詩文の教養)」,「応答（状況に合わせた謎掛けの応答)」,「評価（満足感の表明)」という構造として板書に整理する。
・応答者や評価の内容を正しく指摘できる。

（３）展開Ⅱ（25分～）

○「細殿にびんなき人」(238 段）を読む。
⑤範読，斉読。
⑥敬語（二重尊敬や「啓す」など）に注意して，文脈を正しく読み取る。
⑦前提となっている『拾遺集』の和歌を理解する。
＊展開Ⅰでの構造に加えて板書に整理することで，方法としての共通性を確認する。
⑧定子と清少納言とのやりとりを「絵手紙」の形式で復元する。
＊『拾遺集』の和歌をふまえての,「濡れ衣」をめぐる和歌になっていることを確認する。
・「絵」と言葉による手紙を，本文の叙述に従い書こうとしている。
⑨「笑はせ給ふ」など，他の章段にも繰り返し用いられている表現などから,『枕草子』の方法を理解する。
＊「をかし」が表す状況を確認する。
・複数の章段での共通点・相違点を指摘できる。

（４）終結（45分）

⑩本時のまとめと次時の予告。

生徒学習記録４（「細殿にびんなき人なむ」)

…『枕草子』が「をかし」の文学だと言われるのは，ただ文中に多用されているからではなく，清少納言の用いる「をかし」の感覚の特異性や，定子の悲しい最期を全く感じさせない文章自体が持つ魅力によるところがあると感じました。今日の文章でも，風流を好む定子が，趣を共有しようと清少納言に謎々をしかけます。私が思うに，定子は，ただ風流を好むというよりも，日常の中にそれを見出して，自分で感じるだけでなく他人にも味わわせたいという性分なのです。自分

の知的優越を周りに知らしめようと思う訳ではなく，自然とそうなってしまう，悪意のない十代の女の子の茶目っ気が感じられます。ただ，そのお茶目の相手をしている清少納言は，自身も風流や機転を「をかし」と捉えてはいるものの，やはり定子の期待通りの応答をしなければ，とプレッシャーを感じていたに違いありません。清少納言は，定子と出会って持ち前の才能が更に花開いた，見方を変えると「をかし」は清少納言独自の感性ではなく，定子との生活の中で定子の持つ「をかし」の雰囲気に染まっていったのではないでしょうか。

５，単元展開４－定子像の描き方②－

前記単元展開３でのあるクラスの生徒学習記録に，「…最近授業で扱っている『枕草子』は，きっと定子の全盛期に書かれているものだと思う。定子も実に活き活きと描かれているし，清少納言を信頼して問答を楽しんでいる様子もうかがえる。とは言っても，この後に没落していくのも事実であるので，そのような状況になった時に，定子と清少納言との関係はどうなるのか？ 『大鏡』や『栄花物語』とは違う，清少納言から見た定子の描き方を読んでみたい。」とあった。『大鏡』を読む時点で，中関白家の盛衰と『大鏡』記事の年立てについては略年表に整理をしておいたので，それに合わせてここで初めて『枕草子』記事の年立てにも触れた。この学習記録を全クラスに紹介し，疑問に答える形で以下の章段を 995 年道隆死去以降の記事として扱い，定子像の描き方の変化を中心に授業を展開した。扱った教材と順序は次の通りである。

・137 段「五月ばかり月もなういと暗きに」
・106 段「二月つごもりころに」
・143 段「殿などのおはしまさで後」
・8 段「大進生晶が家に」

以下に学習記録を抜粋して実際の授業の様子を紹介する。

生徒学習記録５（「五月ばかり月もなう」）

定子が亡くなる一年前，『栄花物語』で学習したのと同じ時期の話でした。定子は，『栄花物語』では塞ぎ込んだひどい様子が描かれていたので，非常に心配なところです。さて，今回も今までと同様に漢詩などを前提とした問答があったのですが，今までとは違う所がいくつかありました。まず定子が出てきません。今までの問答の中心には必ず定子がいたので，これにはやはり違和感を感じました。次に，今までは「問」があってから「答」があり，互いの機知を確認して微笑むというパターンがあったのですが，今回は清少納言がフライングをしてしまいます。この回転の速さは，さすがという感じで，殿上人たちも舌を巻いてしまっているようです。『栄華物語』でも，貴族達に高く評価されている清少納言が描かれていたし，彼女の能力の高さがうかがえます。さて，その後も女房と殿上人達との楽しそうな様子が描かれているのですが，定子はおらず，結局は最後の方に出てきただけでした。塞ぎ込む定子の姿は直接描かれておらず，「をかし」とまとめてあるもののやはり，苦しむ定子の姿が浮かんできます。「をかし」を表現する上で，『枕草子』で大きな役割を果たしてきた定子がいなくなったら，清少納言は『枕草子』をどのように描いていくのだろうか，気になります。

生徒学習記録６（「二月つごろりころに」）

前回学習したものと同じく，定子の死の一年前に書かれた（らしい）作品でした。そろそろおなじみになってきた，漢詩を前提としてやりとりをするという形式の話ですが，これまでのものとはやはり違う部分があります。なんと言っても，主人公のように描かれていた定子が全く登場しなかったことは，大きな変化です。また，今回は出題されてもすぐには答えられず，公任に催促までされていました。定子はいつも「笑はせ給ふ」と描かれていたのに，定子が出てこないので，笑う姿も見えません。清少納言が定子を出さなかったのは，清少納言の実際の目には定子の辛い姿が見えていたからだとも思いました。あくまでも，定子は機知に富んで美しく，お茶目で理想の主人であるのだから，辛い姿をわざわざ書くのではなく，清少納言が機転を利かして知識と技術でカバーして，目の前にはいなくてもすばらしい定子のイメージを作っているのかな，とも思います。それにしても，清少納言の，自分がほめられることをも女房としての評価＝定子の評価とする，定子への熱い思い入れは真似できないものです。ここまでしてしまうのなら，定子の死後も，自分を何らかの形で定子と結びつけて，『枕草子』を書き続けることができると思いました。

生徒学習記録７（「大進生晶が家に」２時間目）

今日は「大進生晶が家に」のうち，家の主人である生晶が，恐れ多くも中宮定子に仕える女房である清少納言の部屋に入ってこようとする，という場面を読みました。私は，この場面を読んで，初めは単純にぞっとしてしまいました。この出来事が事実そのままだとは限りませんが，全て作り話だとしたら，あまりにも生晶に失礼なので，何らかの出来事は起こったのだと思います。清少納言の性格からして，相当プライドを傷つけられたに違いありませんが，ここではその感情を前面に出すのではなく，前回の授業でやった場面同

様に，定子が「笑はせ給ふ」ことにつなげています。このような下品な行動を取るほど生晶を調子に乗らせてしまう定子の存在感，そして清少納言たち女房にからかわれ弄ばれる生晶の滑稽さ，そのどちらもが「をかし」だとされています。今回は，いつものような清少納言の教養・機転といった部分は感じられず，定子の描き方についての，もはや執念と言ってもいいような思いを感じ取ることができました。しかし，本当にこの出来事が起きた当時，清少納言にこのような心の余裕があったのでしょうか。いくら清少納言が精神的な強さを持っていたとしてもやはり，「にくし」「ねたし」といった負の感情が起きていたと思います。その状況を考えると，「をかし」という表現のつながり方が，無理矢理に思えるのも仕方がない気がしました。

６，まとめ

学習のまとめとして,『枕草子』をどのように読みとったのかという大きなテーマの基に，「『枕草子』の学習を通してどのような力が身についたのか／『読む』とはどのようなことか／『文学』や『表現の持つ力』とはどのようなものか」に答えるという課題でレポートを課した。以下に抜粋して紹介する。

まとめレポート１

『枕草子』を『大鏡』『栄花物語』と読み比べてみて，定子一族をどう見るかという視点が異なっているが，それよりももっと根本的に，それぞれの文章で言葉遣い，文字遣い，文章の雰囲気が全然異なっていることに気づいた。作者が違うんだからそんなことは当たり前だけれども，今まで僕は，古典の文章を，「日本昔話」のような，「桃太郎」や「一寸法師」のような，作者不在で初めからそこにあるのが当たり前のような，無機質な情報のように捉えていたので，とても新鮮だった。現実には，実際に筆を執った作者がいて，恋愛でも政治でも，言いたいこと伝えたい衝動を，現代のブログのように文字に書き表して，それをひょんなことから現代の私たちが読んでいる。そう考えると古典の文章がとても身近にリアルに感じられるようになった。…

まとめレポート２

…清少納言も，没落後に定子が同じように笑っていては少し無理があると思ったのだろうか，自身の失敗（フライングや度忘れ）等を挟み込んだり，自虐的な笑い話や客観的にはマイナスな事柄を掛け合わせたりして，話が成り立つようにと苦心している。特に，「大進生晶が家に」からはその苦労が伝わってくる。清少納言は，パターン化を行って，それを成り立たせるための細かいつじつま合わせをする才能があり，それを工夫して作品にしている。『枕草子』は文学作品ではあるが，このような点から，清少納言は数学が得意のような気がする。清少納言の知性は，ただの和歌や漢詩の教養といった文学的センスに止まらず，綿密な計算が出来る数学的な才能を含んでいたと思う。

まとめレポート３

…いつも笑顔で穏やかな定子や，気さくな伊周たちが登場する中関白家は平和な一家だというのが僕の印象でしたが，『大鏡』『栄花物語』を見てみると，泣いてばかりで暗い定子や，幼稚でダメな性格の伊周など，マイナス一方に描かれており，信じられなかった。それと同時に，これが清少納言の「文章の力」だということに気づきました。清少納言は「大進生晶が家に」にあるように，傷心の定子を力尽くで笑わせるなどのすさまじい「表現力」を持っているのと同時に，いつも平和な中関白家を演出するために必要な情報と不必要な情報とを取捨選択する「編集力」においてもすばらしい力を持っているので，読者は『枕草子』を読んでだまされるのだと思いました。『枕草子』を通して「文章の力」を実感しましたが，それは『枕草子』のような古典にだけあるのではなく，どんな人が書いた文章にも少ないながらもその力は宿るのだと思います。…

まとめレポート４

もし『枕草子』を順番に淡々と読んでいたら，私は定子の人生や人柄について全く違う印象を持っていたと思います。授業でやった読み方では，一段毎に，清少納言の目から見る定子の描き方のクセを分析してゆくことで，普通に読んだだけでは分からないことが多く発見できました。清少納言は，定子が没落して泣き暮らしている様子を，様々な方法を駆使して，少しでも以前の憧れの存在であった姿に近づけて，読者にごまかそうとしていたのかもしれないけれど，清少納言のクセを知ってしまったら，矛盾点が次々に見つかって面白かったです。清少納言の主観に飲み込まれてしまうだけでは，「読む」ということの本質に全くふれられないのだと分かりました。私が『枕草子』学習を通して学んだことは，「読む」ということは筆者の主観を対象として捉えて，ただ真実との違いを見つけて正誤判断をするのではなく，その違いには筆者のどのような気持ちが込められているのかを楽しむことだ，ということです。実際に『枕草子』の中の定子と現実との差は，清少納言が「をかし」大好きで，その象徴・理想として出会った主人である定子を没落後も憧れの存在として見ずにいられなかったという，清少納言の人間らしい一面からではないかと思いました。…

まとめレポート５

『枕草子』をまとめて読んできて，清少納言がいつ

も文章の中心に据えていたことは，定子の人物像，とにかく定子がいかにすばらしいか，ということだった。中関白家が没落してしまった時期の定子達の様子を書いた文章を読むと，定子の境遇と清少納言の書きようとの間で違和感すら感じてしまう。その違和感を感じるようになってからやっと私にも，清少納言の一貫した文章を書く姿勢が見えてくるようになった。彼女の文章では（類聚的章段でも），彼女自身のものの見方が形容詞を用いることで割とあけすけに表されていると思っていたが，それは思い違いだった。回想録ということで，彼女の見たもの感じたことが率直に表されていると錯覚していたところがあった。回想録の中で彼女が用いる形容詞は，客観的ではないのと同時に率直でもないだろう。私は，清少納言が回想録の中で，定子という一人の人物を作り上げようとしてきたのではないか，と思う。回想は現実に即しているようで，実は文学の一形式でしかない。定子は美しくて絵巻物の人物が現実に表れたようだと，「事実は小説よりも奇なり」みたいなことを，「小説」の中で語っているという奇妙な事態に気づかないのも，回想という形式の仕掛けによるものだと思う。また，清少納言がどうしてそのように定子像を作ってきたのかということが，『枕草子』という作品の核にあると思う。定子を慕う親愛の情だとか，懐かしむ気持ちによるものか，それとも大変な境遇にあった定子の人生を美しく色づけして補完するためなのか，これらはただの憶測でしかない。けれども私は，清少納言のやり方は定子という一人の人間の一面しか切り取っていないようにも思う。文章の中の登場人物としてはとても薄っぺらで一面的だし，死んだ人を語ることはとても一方的で，実際の人と語られた人とではズレが生じる。人物について書く時には必ず生じてしまうことだが，清少納言は特に自分が見たいことだけ，見て欲しいことだけを切り取っていて，私はその純粋さが，「表現したい」という気持ちとともにある，人間の業なのかと，少し悲しくなった。

まとめレポート６

…けれども僕らは，すでに『大鏡』や『栄花物語』の一部を読んでしまったので，純粋に中宮定子とその家族を本当に素晴らしい人物とは思えなくなってしまっている。「この場面では，本当は悲しんでいるのだろう」などと，清少納言の描きたかったこととは全く違うことを思ってしまうあたり，清少納言の伝えたかったことを完璧に裏切ってしまっているようにも思う。「読む」というのは，この場合，「作者の描きたいもの」を読み取ってから後が本番だと思う。…

まとめレポート７

「随筆」というジャンルに分類される『枕草子』であるが，私はこれは「物語」として扱ってよいと思う。そうも言いたくなるほどに，『枕草子』には章段同士の強いまとまり感が存在している。類聚的章段では文体がそれこそシリーズものらしくて分かりやすいが，日記的章段での「をかし」や，定子の笑顔などに代表される，作品を連ねるための規則は，清少納言その人の生き方や，確固たる思考に起因している気がしてならない。（中略）頭のよい筆者のことだから，「ただ大好きな定子様を彩りたい」という思考だけでは『枕草子』を書いてはいないはずだ。雪やささやかな日常の美しさ，和歌や漢詩の機転，時には自分の恥も。「私はこんな人間です。」という描写はないのに，清少納言の凛とした人格や潔癖さ，弱さなどがはっきりと見て取れるのは，そのためであろう。文学においては，嘘か真実かは，さして問題ではなく，いかに伝えたいことを浮き彫りにできるかが，その勝負所なのだと，『枕草子』を通してつくづくと思った。

本稿冒頭に記したように，「比べ読み学習」のポイントは，テキストではなく学習者の側にある。多くのテキストに振り回されるのではなく，個々のテキストの意味を比較し評価するということは，「批評する」という視点を経験し，獲得することでもあろう。批評とは，その一端が自己に向いていることを自覚することによって価値あるものになるので，「比べ読み学習」によって生徒が自身の言語活動や思考の枠を振り返ることが求められる。

まとめ１に類するものが多数あったが，これを高校２年生としては幼い感想として処理するのではなく，「教室の場での読み」が広く一般化してゆく契機として，このような感想を繰り返し味わわせることが大切であると考える。それが，まとめ２・３のように『枕草子』というテキストの本質を自分の言葉で表現しようとしたり，まとめ４・５・６のようにテキストとの対話を深めることにつながってゆく。まとめ７の生徒は，『大鏡』レポートで「…（『枕草子』の登場人物は）絵巻物の中の人物ように，一方『大鏡』では，…「現実」の人間らしく描き表されていた。（中略）「どこを深めて人物を表すのか」という部分で，違っていたのだと思う。個人的には，少し夢見がちとも言える『枕草子』の彼らの方が，私は好きだ。」と記していた。この生徒の場合には，『枕草子』に対する評語が，「少し夢見がち」というものから「清少納言の生き方や確固たる思考」，「文学において嘘か真実かはさして問題ではない」へと変化していることで，批評の視点を獲得できたものと思われる。このような具体的な経験をすることが，「比べ読み学習」のめざすものであると考える。